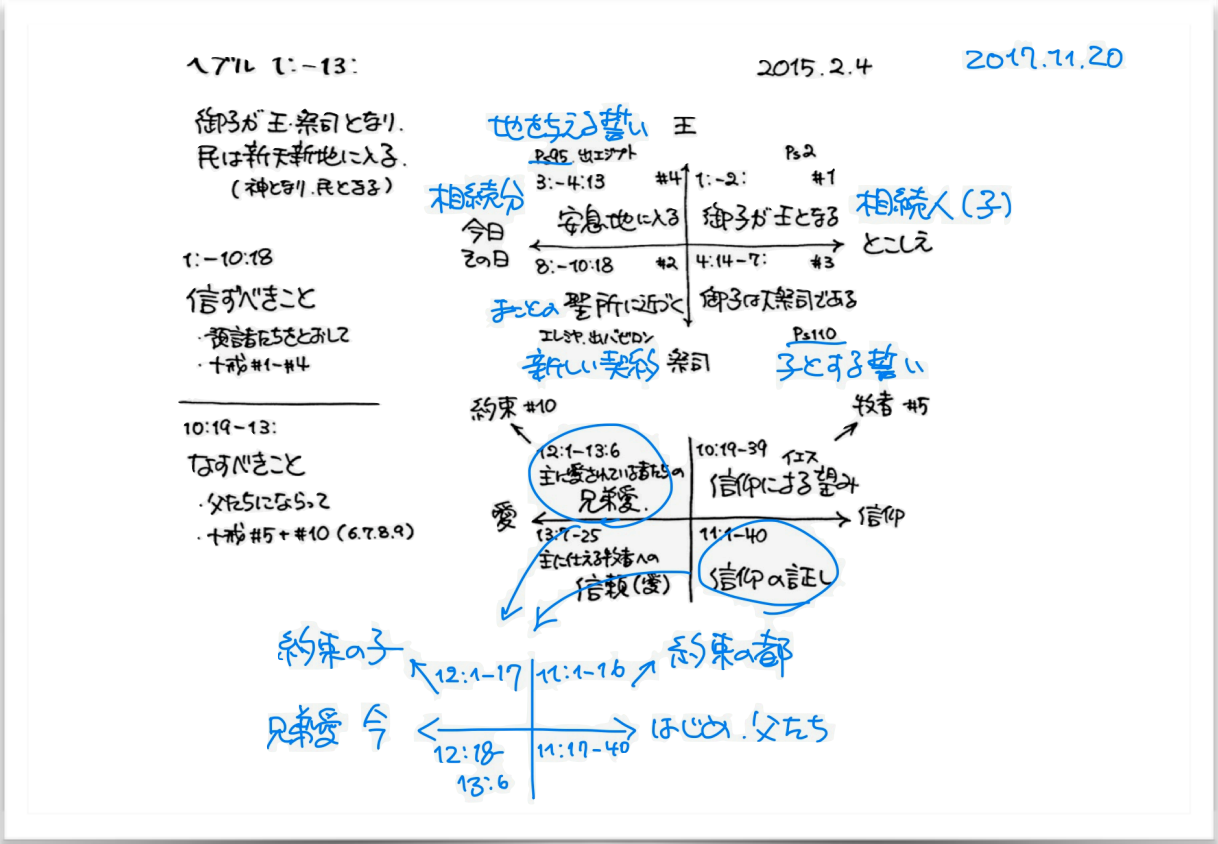
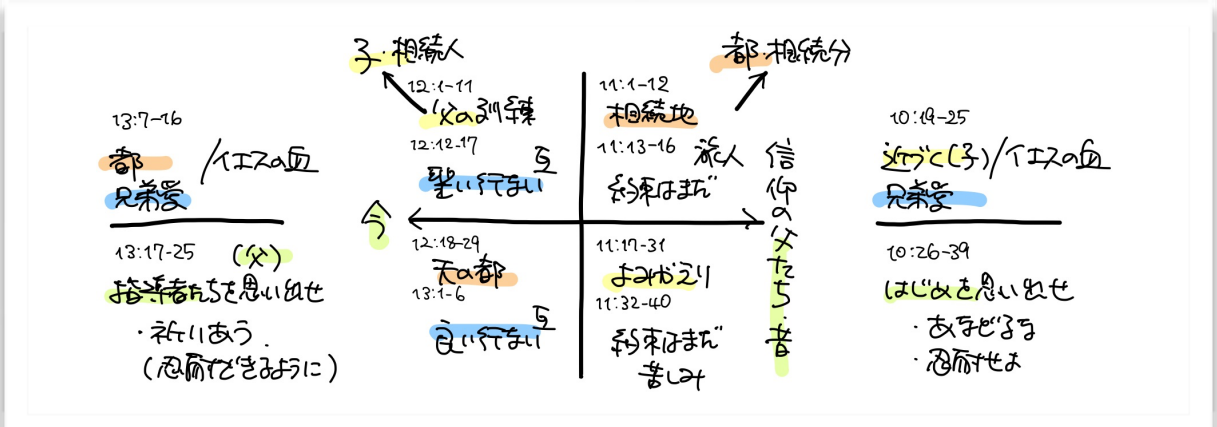
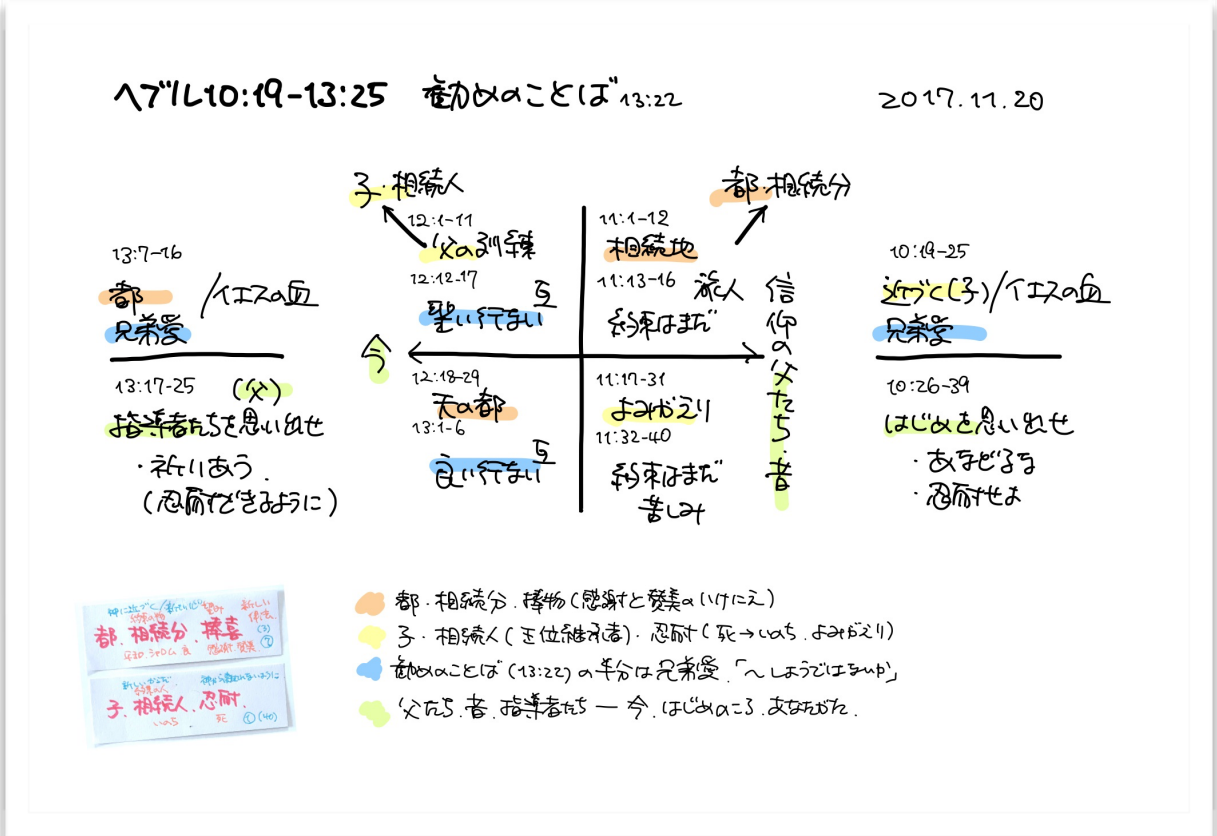
ヘブル人への手紙10:19-13:25



ヘブル人への手紙の10章19節から13章25節まで。ヘブル人への全体は、最初に4つの「信ずべきこと」、そして、最後のところに「なすべきこと」ということで構成されています。御子が王となる、子とされること(1:-2:)。安息地に入る、約束の地に入ります(3:-4:13)。御子が大祭司である(4:14-7:)。聖所に近づくことができる、新しい聖所(8:-10:18)。この4つの「信ずべきこと」と、その信仰に基づいて、このことをしてください(10:19-13: なすべきこと)というところです。前回やった時にも信仰と愛というように考えていましたけれども、今回もう少し詳しく見てみました

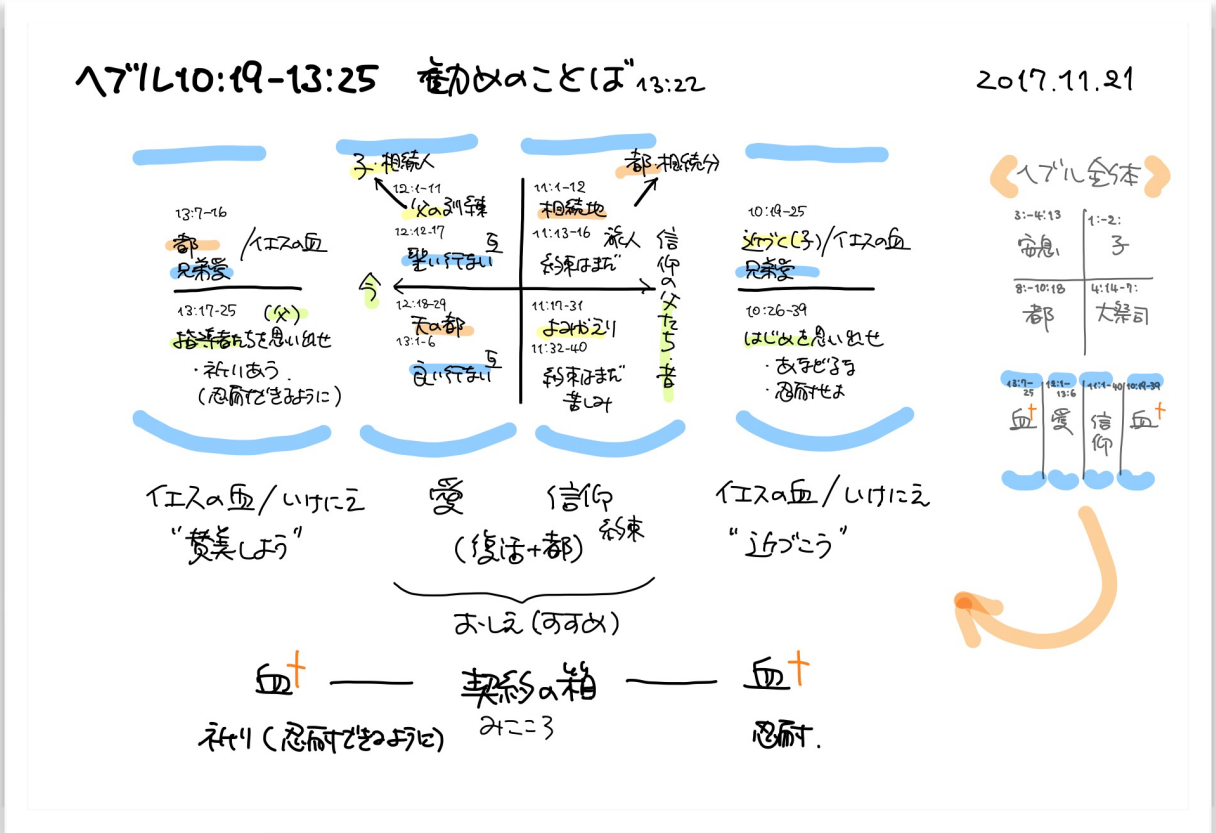




真ん中、11章から13章6節のところは、わかりやすいです。区分としては。「信仰によって、信仰によって、信仰によって」、そして、まとめのようなところがあって、また「信仰によって、信仰によって、信仰によって」と言って、まとめのようなところがあります。この信仰によってというところを見ると、最初のほうは(11:1-16)、約束の地です。相続財産、約束の受けるものについて、都について話していました。後半の「信仰によって」(11:17-40)は、「よみがえり、よみがえり」、約束のいのちのほうです。約束の都に入る、約束のいのちを得るという約束のいのちを求めているという先祖たちの信仰の戦いの話をします。

次の12章1節から13章6節までは、何だろうということですが、ここ(12:1-11)に懲らしめの話があって、互いに兄弟に対して清くしなければならない兄弟愛について(12:12-17)話します。そして、シオンの山に向かっている、揺り動かされないで感謝しようではないかと言って(12:18-29)、また兄弟愛の話をします(13:1-6)。

こちら(12:1-11,12:12-17)が子とされること、こちら(12:18-29,13:1-6)が都を受けることということで、先ほどの信仰の先祖たちの話とクロスしていると分析していました、前に…。こちらは先祖たちはと言いましたけれど、今あなたがたは…ということで、「昔こうでした。今はこうです。」ということで、この2つが区別されるのだろうと思います。



最初の出だしのところ(10:19-36)、終わりのところ(13:7-25)の役割が何だろうかということに悩みました。

この「イエスの血によって…～しようじゃないか。～しようじゃないか。」という励ましのことば。それで、「侮るな。忍耐せよ。」というところから、この信仰の先祖たちの話がきます。それで、「兄弟愛をもって行ってください」という話のあとに、また最後に「イエスの血」の話があって、「～しようじゃないか。～しようじゃないか。」という「薦めのことば」が書いてあって終わっていくのですけれど、この出だしの10章と13章の終わりのところの役割が何でしょうということを考えました。言っている内容が都の話だったり、子とされることだったりと似ていることを言っているので、余計にここの役割が何だろうかということだったのですが…。

ヘブル全体の配列の中で、最後の励ましのことば、薦めのことばが、「イエスの血・信仰・愛・イエスの血」「イエスの血・信仰・愛・イエスの血」というように、4つの部分に分けられて、ここの部分(10:19-25,10:26-39)と、ここの部分(13:7-16,13:17-25)は、捧げものは捧げものなのですが、ヘブル全体で見ると、子が相続人として選ばれている。約束の地に入ります。大祭司が選ばれて、新しい都が作られているということなのですけれど、この安息の地、都の中心にある王座、「契約の箱」の話がないのです。ローマ人への手紙には、信仰と愛について話して、新しい契約の書物として位置づけられると思うのですけれど、このヘブル人への手紙の中では、この部分10章19節からのところが、契約の箱。神様の教え、神様の薦め、みこころが教えられている部分。その意味でなすべきことと言っているところです。聞いて行うべきこと。信じて愛を行うということで構成されている。

その回りに、契約の箱に血が注がれて、いけにえが捧げられて、この教え、みこころがありますということなので、ここ(10:26-39)に「忍耐せよ、十字架を負ってついてきなさい」と言われているのと同じように、忍耐して自分たちをいけにえとして捧げられるものなのだから、苦しみを通して戦うようにと。最後のところも(13:15)、直接「賛美のいけにえを捧げようじゃないか、神様はこういういけにえを喜ぶのです」という話がありますけれど、この書いている人が、「祈ってください。私たちのためにもっと祈ってください。」というようなことを書いています。指導者たち、指導者たち、指導者たちというこのリーダーが祈っているのですけれど、祈っている内容というのは、忍耐できるように祈ってくださいということなのですよね。ここで、耐え忍ぶ、十字架の死、自分たちがいけにえとして捧げられているということを忍耐して、信仰と希望と愛を最後まで保ちなさいと言われている契約の箱が、ヘブル書全体のなすべきところに書かれているものだろうと思われます。この箱が血で清められているという構成なので、出だしと終わりのところに囲まれているのだろうと思います。

出だしのところにも(10:19-25)「〜しようじゃないか」というところに、「信仰を持って近づこう、望みを告白しよう、そして愛を行いましょう」という、信仰と希望と愛の話が励ましとしてあります。「都を求めよう、みもとに行こうではないか、賛美と感謝の善を行うことのいけにえを捧げよう」と励まされているところに要約されている薦めのことば。その前提として、イエスの血というものがありますので、最後のところで(13:17-25)「永遠の契約の血による羊の大牧者。私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神…」その平和の神が、書いている私たち、指導者たち、リーダーたちのうちにみこころが行われ、書かれている相手の人たちの中にもみこころが行われるようにという祈りで、このヘブル人への手紙がクローズする。

出だしのところに、普通の手紙にある「恵みと平安があなたがたの上にありますように…」ということばが無くてこの手紙は始まるのですけれども、最後のところに、ちゃんと「平和と恵みがともにあるように」という言い方で終わっていくということです。詩篇に似ています。信ずべきことと私たちの応答という形で、ヘブル人への手紙が構成されていると思われます。